

老人とムーヴメンツ

The Old Man and His Movements

晩年のグルジェフの思い出

ピエール・シェフェール

ピエール・シェフェール（1910～1995）はフランス・ラジオ・テレビ局（RTF）の技術員として働き、音響振動学の研究者、具体音楽（ムジーク・コンクレ）の創始者、著作家としても知られる。第二次大戦中にはレジスタンス活動に関与した。グルジェフ『ミーティングの記録』の登場人物のひとりである。グルジェフの死後、グルジェフの生涯と業績を取り上げたテレビ・ドキュメンタリの制作に関与した。

私は自分を失うたびに……

私はよく長い旅にでかける。そのたびに数ヶ月も家を離れる。スカンジナビアのホテルで、太平洋岸の町々で、洋上に浮かぶ滑走路で、アフリカの市場で、アステカの寺院で、私は自分が教わったとおりに坐る。私はみずからのうちに平和を見つけようとする。それを頭のなかに見つけようとしても無駄であることはよくよくわかっているのだから、私は謙虚な姿勢をもって、筋肉の緊張を解き、身体の鎮まりのなかになんかそれを見つけようとする。ときとしてこれはうまくいく。とくにこれを毎日のエクササイズとしてしているときは。

だが、状況的に見てそんなことは不要と思えたり、旅の都合や仕事の都合、あるいは社会的な責任を果たすのに忙しかったり、ほんとうに楽しいことに夢中になっていたりして、これをほんの二～三日でもしないでいると、私はすぐにふらつきだす。そのあいだにも、仲間たちは、はるかかなたの大都会、パリの街で、ミーティングを重ねているのだった。彼らは執拗に何度も同じ課題に取り組むことをやめない。人が見たら、そんなことをするよりも、名の知られた機関で研究員になるとか教会に通うとかしたほうがずっとためになるのになと思うだろう。なにがなんでも一日に十五分の時間を割いて「自分を思い起こす」こと。彼らは私にこれを約束させた。私はこれをいつもできてはいない。

自分を忘れて過ごした数ヶ月の後、パリに戻る。自分を見つけようとして世界中をさまようという空しい試みによって自分をいっそう完全に失った後、自分をふたたび取り戻すにはどこに行ったらよいのか、私にはわかっている。だから私はそこに行く。いや、「行った」と言うべきだろう。もうこれは過去の話になってしまったからだ。私はその場所に行ったが、意気揚々と行ったのではない。人が喜び勇んで血液検査とか歯科検診とかに行くことはない。自分の魂、あるいは自分のなかにある貴重ななにか、それは身体の器官ではないが、それにもケアは必要だ。だから私はグルジェフに会いに行った。

的外れの質問をしたり、法外な期待を寄せたり、心を決めかねて延々と時を過ごしたりというような時期を私はもう通り過ぎていた。彼は重みをたたえた褐色の目から、やさしいがアイロニーの混じった視線を私に注ぐだろう。それを私はあらかじめ予期していた。その視線にはたいへんな鋭さがあったので、私が彼を見つめても、そこに見えるのは彼の姿ではなかった。彼の目は人生を映し出す鏡だった。ふつうの鏡なら、それはおとなしく、ひとつの像を返してくるだけだ。だが、彼の眼差しの鋭さは、私が自分自身をもってそれに応えることを求めていた。それは私にできることの範囲を越えていた。私がなにか言いたすのを彼は待つのがだったが、私には話せることがなかった。自分のしてきた旅について、彼に話して何になるだろう。彼みずからが途方もない旅をしてきた。自分のしてきた冒険について彼に話して何になるだろう。彼は前代未聞の冒険家として、あらゆる記録を破っていた。私の成功、私の長所、私の短所、そんなものに何の意味があるか？ 人の長所や短所など、彼にとっては、どうでもよいことだった。彼が問題にするのはただひとつ、人の存在のありかた、その重みだった。空港に置かれた計量器さながらに、グルジェフは、精密機械の容赦なさをもって、私のエネルギーの振動数や私の電圧を測定した。だが、それは敏感な機械、繊細な感受性を宿した機械だった。だれがそんな彼を何度もがっかりさせることに堪えられるだろう。

前に会ったときと比べて、意識性を帯びた原子の量をたった一個分も増やしていない。自分をまったく豊かにしていない。そんなときには、彼と一対一で対面するのがためらわれた。それでも彼に会ったほうがよいことはわかる。そこで私は、毎週水曜に彼のアパートマンに集まるおおぜいの人たちに混ざることにする。それなら目立たないだろう。決心がつかず家に留まる人たちもいた。いわば教えを求めてインドやチベットにまで行くには及ばずというわけである。まもなく私は、そういう人たちが見せるかすかな素振りから、それでも彼らはどこかに向かって進んでいるのか、それとも大きく後戻りしてしまったのかを言い当てることができるようになった。

グルジェフの食卓で

[瞑想的なエクササイズの中の] 耐えがたいまでの沈黙、そして延々と続く朗読の後、水曜の晩のミーティングの出席者たちは、ようやく体を伸ばせるのだった。[長く坐った後なので] 体の節々が痛いのだが、みんなぞくぞくと居間に入っていった。居間にはせいぜい二十人しか座れず、廊下のスペースまで使って全員が立っても四十人が限界だと思われた。ところが、すでにみんなわかっていることとして、工夫すれば隙間は作れる。三十人分の空間には六十人を詰め込むことができる。台所と居間の間を人間の鎖でつなぎ、リレー式に皿を運んだ。台所で盛り付けをするのはムッシュー・グルジェフの仕事だった。プラチナ・ブロンド [フランク夫人のニックネーム]、ディレクター [晩餐の席での進行役]、ミス・アンダスタンディング [シモーヌ嬢のニックネーム]、マダム・エグー [下水口すなわち別腹を意味する晩餐の席での役職名で余ったお菓子を食べるのが仕事] といった特別な人たちには、特別な皿が用意された。台所からムッシュー・グルジェフが戻ってくるとすぐ、スパイス入りウオッカのグラスが満たされ、会食の儀式の進行役が、それではまず「人並みの馬鹿」(ordinary idiots) に乾杯しようと提案する。私は自分をこの「第一のタイプの馬鹿」に分類していた。[このしきたりにおいて] 人がひとつのタイプの馬鹿から別のタイプの馬鹿 (丸い馬鹿、四角い馬鹿、多角形の馬鹿、病的な馬鹿、絶望的な馬鹿など) へとどんなふうに「出世」していくのか、私はその仕組みの詳細を究明しようとしたことがない。ナポレオンが無理やり法王に自分を戴冠させたようにすればよいだけなのかもしれない。[新参者は自分がどのタイプに属するかを自己申告するのがしきたりであり] 私は恥ずかしげもなく、いちばんよさそうに自分に思えたタイプとして、自分はあらゆる馬鹿のなかでいちばん低くランキングされている「人並みの馬鹿」であるということにした。これを選んだのには二つの理由がある。第一の理由として、たぶん馬鹿というのは身分が低いほどましなのではないかと思ったので (いまでもそう思っている)、このいちばんありふれた馬鹿というのを選んだ。第二の理由として、たいていの人には馬鹿の階級制度のなかでだんだん出世していくようなので、まずは最下層から始めたほうが格好が良く、謙虚が自慢の自分にとって似つかわしいと思った。晩餐の席での一回目の乾杯は「人並みの馬鹿」に捧げられ、そのときにはこのタイプの馬鹿のひとりとして、私も脚光を浴びるのだった。だが、私はまんまと罠にはまったのだった。自分が属する馬鹿のタイプを選ぶときは、みんな必ずよく考え、これがほんとうにぴったりだと自分で思えるタイプを選ぶように言われていた。結局のところ、私もこの忠告に従って、正しいタイプを選んでいたのである。

「馬鹿への乾杯」として知られるこの儀式は、ムッシュー・グルジェフにとって、尽きることのない愉しみの源だった (まことにもっともなことである)。乾杯のたび、彼

はその特定の馬鹿のタイプに属する人たちのほうに向き直り、グラスを高く上げて、満面の笑顔を送った。その微笑みは、彼らのなかにあって情けない状態に置かれている彼らの本来的な自己と、彼らのこっけいきわまりない生きざまの両方に向けて、温かいものを送っていた。自分について白状すると、私は、食卓でのホストとしての彼が私に向ける眼差しのなかに、いつも皮肉が含まれているような気がしていた。この馬鹿はいったいどこから来たんだ？ 人並みの馬鹿を気取っているが、ほんとうのところは？ 突如として火花が生じ、別のところで火事を引き起こしかねない火種としてくすぶった。この単純な舞台設定から、しばしば突発的に、信じられないような光景が生じた。いっそう火をあおるかのように、酒を飲むのをこわがる人にはふんだんにウォッカがふるまわれ、甘党の人には超辛のパプリカがふるまわれた。そうしてタマネギもハルワ〔トルコ菓子〕も胸焼けするまで食べた後には、周囲の人たちを見て驚嘆するとともに、自分もまたどんなありさまをもって周囲の人たちを驚嘆させているのかわかったものではなかった。節制を旨とする酒嫌いの生真面目な人たちのグラスに十杯目のウォッカが無慈悲にも注がれる一方で、残念ながらごく少数しかいなかったが、陽気に飲んで騒ぐのが好きな連中は、もちろん好き放題には飲み食いさせてもらえなかった。大食漢に向かってはそうした習癖がいかにかんづかしいものであり、彼らの過剰な食欲がホストにとってどれほど負担となるかが指摘された。「これがいくらするか知っているかな？」 ムッシュー・グルジェフは小さなダイコンを手にとって聞くのだった。「わしがコーカサスから特別に取り寄せた特別なダイコンである」。ほんとうはヌイイの市場で買ってきたダイコンだった。

喜劇とは、恐怖と安堵、窮乏と贅沢、厳粛と滑稽など、一見して矛盾する二つの要素の間にあって感情の解放をもたらすものだと言われる。グルジェフの食卓はまさにそのような場だった。あたかも厳粛な儀式のような晩餐の席で衝突をはらんだ奇想天外のやりとりが展開される間も、それに先立つ二時間にその場に張りめぐらされた静寂の網目は簡単には破れなかった。互いの間で交わされる微笑みやジョークのなかに、それはまだ感じられた。あまりにも取りつくろったふるまいも、あまりに行儀の悪いふるまいも、からかいや軽いあしらいを招き、本人はたちまちその重圧に打ちのめされてしまうのが常であった。そこに漂っていた空気は、おごそかでもありラブレール風でもあった。エキゾチックでありながら、質素な僧院のようでもあった。ふざけた場のようでありながら、沈思黙考の場でもあった。ふつうに穏当と見なされる限度を越えて食べたり飲んだりしなければならぬ、数々の罨にはまらぬように警戒を怠ってはならない、複雑な決まりごとのある乾杯の儀式に加わりながらも内的な取り組みを忘れてはならない（だれも口では言わなかったがこれは当然のことと思われていた）。われわれがそうした責任を果たすことで、そこには特別な空気が生まれたのだった。（グルジェフの食卓ではい

くら食べても消化不良を起こすことはないというのが定説となっていて、これはまさにほんとうであることが実証されている。) 多くの人が怖がるこうした晩餐の席で、私は自分の本源的な要素に立ち返ることができた。気分が軽くなり、若返り、ほんとうの意味で自分を取り戻し、家路につくのだった。それは眠りに対する私の闘い、悲観的になりがちな傾向や胃腸の問題に対する私の闘いを大いに助けてくれた。

上述のような食卓の席で私は喜劇的なものをたくさん目にしたが、なかでも愉快だったのは、お客たちがしばしばグルジェフの言うことを鵜呑みにしたり、グルジェフが口にしたちょっとした言葉のなかに深い教えや意味を見つけようと躍起になったことである。私はそうしたことに口をはさまず、心のなかで「アホ」と思うだけにした。晩年のグルジェフが見せた過激なまでの気前のよさ、彼が一身に引き受けた大きな重荷、彼がわれわれを思ってしてくれた莫大な苦勞、ちょっとした仕草のなかで彼が見せる思いやりの深さ。それは私を感銘させ、だから彼がハルワを差し出したり、キュウリを取ってくれたり、ひとさじのソースをかけてくれたりというような仕草のなかにさえ、特別の意味がこもっていたり、特定のだれかにとって特定のことを意味していたりするように見えることは私にもあったが、それでも私はむしろ、彼がその対価として支払っているはずの多大な疲勞、そしてこの舞台設定のなかで演じられている悲劇〔受難劇〕を意識せずにはいられなかった。

どうして彼はこれほど数々の矛盾をその身にまとったのか？ 食卓の席での数々の無愛想な決まりごとの背後にはどんな精妙な法則が控えていたのか？ ときには晩餐は遅くまで続き、たいへんな疲勞のせい、そしてもちろんウォッカのせいで、彼は言葉に詰まることもあった。一部のお客とは違って、私は彼が百発百中であることまでは期待しなかった。むしろ私は、そんなふうな状態で四十五分ほど場が停滞した後（めまぐるしい展開を追うのに疲れていた注意を休めるための機会として私にはそうした時間もありがたかった）、彼が一瞬にして場の空気を一変させたり、多大なレパートリーをもって臨機応変のふるまいを見せたり、感情のわだかまりを一瞬にして解いてみせたりするのを見て、おおいに驚くのだった。彼はなんの前触れもなく復歸して、とても個人的なことで、あるいはまったく非個人的なことで、お客のひとり深く突くこともあった。どんなふうにもあれ動揺または感銘することなしに家に帰れる人はいなかった。

ひとりでワーク〔エクササイズ〕に取り組んでいるときは、自分の取り組みの方向性や真剣さは、まったく自分しだいである。それとは対照的に、こうした会食の場では、連鎖反応により、ふつうには想像しがたいようなことが起きた。食べることと話すことは、たいへんな意義を帯びた行為となり、食卓をはさんでの言葉のやりとりは、ナイフを投げ合うのにも似ていた。探照灯の光がそこかしこを照らし、みんな隠れ場所を失い、

脱走者は捕らえられ、二列に並んだ銃剣の間を通過して戦場に連れ戻される。もっとも、だからといって、身の潔白を証明するために赤熱した鉄に触れろとか毒を飲めとか言われることはない。天の裁きは寛大であり、もう一杯、ウォッカを飲みたまえと言われるだけである。天からの恩寵として酔っ払うことも許されていないような人間が、精神的に進化した人間を自称できると思っているのかね？

この大いなる晩餐……私はこうしてこの言葉を使うだけでも動揺してしまう。それは歴史上のもうひとつの晩餐を思い起こさせるからだ。棍棒で打たれたかのような衝撃をもって、われわれは自分たちが、キリストの受難劇におけるあの聖餐の場の列席者であったことを知る。われわれは主とともにあって同じ皿に手を浸して食べたのだった。ユダの面影、あるいは「主の愛された弟子」[一般的にはヨハネを指すと解釈されるが最後の晩餐でイエスの胸元にもたれると描写されることからマグダラのマリアを指すと解釈したほうが自然とも思われる]の面影を思い出し、われわれは気が遠くなる。大嫌いなウォッカで顔を赤くした意志堅固なる「銀行員どの」は、まさにペトロだった。「ディレクター、もう一杯、乾杯しようではないか。ところで君はまったく飲んでいないようだが」 食卓には、気を失って[主の胸元にもたれかかる]マグダラのマリアもいた。哀れなほどに善意でいっぱいマルサ[マリアの姉]とニコデモもいた。グルジェフは自分でもこの類似に気づいていたのだろうか。いかに不謹慎な連想と言われようとも、儀式的な会食というそれだけのことで、われわれはこれから最後の晩餐を思い出さずにはいられない。

言うまでもなく、その場にいた仲間たちのなかで、こうしたことを口外した人はほかにいない。[最後の晩餐を模したものである]聖体拝受の儀式に参加する人たちが秘蹟に関する秘密のことを口外しないように、私が知るかぎり、ともに食卓を囲んだ人たちのうち、その場で起きたことを口外した人はこれまでおらず、私はいまそれをはじめて口外しているとはいえ、かなりの抵抗を感じながらそれをしている。だが、自分が証を立てようとしていることのこの大事な一側面についてどうして言わずに済ませられるだろう。聖餐をめぐる神学的な議論をする気はないが、ここでひとつしておくのが私の義務であろう。意識の集中、そして人間的な緊張をはらんだ場の設定という条件が満たされたならば、魔術や集団催眠などに頼ることなく、どんな食材（キュウリでもピーマンでも）を使っても、聖餐（コミュニオン）は再現されうる。聖餐という言葉を使うとき、私は寓話的なたとえ話をしているのではなく、外面的な形式式について言っているのでもなく、精神と肉体の両方をもって体験される一種の秘蹟としての聖餐について言っている。

このような秘蹟の秘密を知ったなら、たいていの人は、それをさかんに宣伝したくな

るだろう。だが、グルジェフはただ次のように言うだけだった。人はなんでも食べられる。だが、食べたものをどれだけ消化できるかにすべてがかかっている。宇宙規模の現象として、食べるということは、破壊的な行為にも創造的な行為にもなりうる。それは食べ方が宇宙の法則もしくは神の意志に沿っているかどうかによって決まる。

精神分析家が顧客からカネを巻き上げるみたいにしてグルジェフは人からカネを巻き上げるとい話を百回ぐらい耳にしたが、私には信じられない。グルジェフはカネのことをしばしば話題にしたというのはほんとうである。グルジェフは食事の用意にカネを費やし、招待されるにふさわしい者にもふさわしくない者にも、分け隔てなく食事をふるまった。父なる神の身になって考えると、天の財源に痛手を与えるひどい仕打ちをしているようにも見えた。われわれのホストは、恐ろしいほどの気前のよさをもって、惜しげもなく消費することができた。(若いころ、彼は毎晩のようにルーブル紙幣を燃やして自分と仲間たちをわざと困難な状況に追い込み、そこからの抜け道を見つけるのを趣味にしたという。) そしてその姿からは、彼が一方ではカネの価値を認めながら他方ではカネを軽侮していることがうかがわれた。底なしの気前のよさを見せながら、ときにはケチであるように装ったり、価格交渉の手腕を見せることもあった。

かくして、どんな状況にあっても、需要と供給の法則、そしてホストとゲストの関係のうえに、われわれの五感を満たすコミュニオンの場は成立するのだった。

グルジェフの用意する食事は、東洋風に調理され、香り高いハーブで味付けされていたが、一部の人と言うほど「特製」のものではなかった。キュウリはもちろんロシア産、デザートはギリシャ産、スイカはスペイン産ということになっていたが。奥の部屋から大量に運ばれてくる料理の数々をこの祝宴に用意するために世界中の富を略奪してきたということにするのがポイントである。グルジェフは私にとって自分のおじいさんのようであり、キリストのようでもあった。このふたりの人物像を重ね合わせるのは不謹慎なことだとは思わない。父なる神に至るにはキリストの導きを必要とすると、私はうんざりするほど言い聞かされて育ったが、自分はキリストについてなら多少は知っているとは思っても、父なる神がどうして必要なのか、これまでほんとうに理解したことはなく、父なる神の奇妙に情熱的な性格についても理解したことがない。キリストの受難はミサで何度も言及されるが、彼の受難は一回きりだった。だが、父なる神は、永遠に、あらゆる瞬間において苦しむ。彼はみずからが創造した世界を維持し、みずからの魂をいわば果実として世界に分け与える。その姿はまるで、コーカサス生まれの口髭をたくわえた老人のよう、あるいは校長先生が聖職者と同じぐらい尊敬されていた古い時代の校長先生のような。顎鬚は伸ばしていないが口髭をたくわえた実在の人物に重ね合わせて、私はようやく神の姿を思い描くことができた。出席者にその資格があるならば、つ

まりじゅうぶんな注意深さをもって受け取る用意があるならば、この世においてコミュニケーションを体験することは可能である。ウサギが調理される前に味わう苦痛。子供のころ、私はその苦痛を知って衝撃を受けた。グルジェフは肉食をやめろとはわれわれに言わず、むしろみずから大きな歯をむきだして食べ、人間の置かれた状況とあまりすぐれたものではないその境遇、創造の階梯の上でのその位置を受け容れた。ウサギが苦しみ、父なる神も苦しみ、そして神の用意したこの世の富はみな、一種の食べ物として受け取られるか、あるいはこの「食卓」に招かれた人たちの理解不足と愚かさゆえに拒絶されるかのどちらかしかない。そのように見るとき、宇宙のすべては、この食べるという行為の成就にかかっている。われわれはまだ、精妙な材料で作られた純白の無発酵のパン〔聖体拝受で授けられるパン〕を食べるにふさわしいほどのところまで到達していない。われわれにふさわしいのはむしろ、福音書にも言及されているところの肉汁である——「私とともにあって同じ皿に手を浸した者のなかから私を裏切る者があらわれる」。

最後の晩餐について思うとき、グルジェフのもとで過ごした日々のことを思わずにはいられない。レオナルドの描いた絵はもうひどく傷んでいて、絵の具も剥げ落ち、形の崩れた人影が見て取れるだけだが、それでも絵は神秘的なものを残している。わずかに残る絵の具の痕跡、カビで汚れたその痕跡からも、作画当時と変わることなく、キリストとその弟子たちの存在感が浮かび上がる。閉じた目を開くことさえできるなら、望む者はだれであれ、最後の晩餐に加わることができる。だが、悲しいことに、最後の晩餐は例外なく、師と呼ばれるにふさわしい人物の最後を飾る出来事であり、これはそうした人物の最後の思い出となる。

私はグルジェフと食事を共にした時間が自分にとってこのうえない祝福であることを自覚しつつも、ここでは戯画的にそれらの晩餐でのことを描写した。とはいえ、いま私は教会のミサに行くたびに、彼のことを思い出さずにはいられない。〔最後の晩餐を前にしてキリストがしたように〕彼もまた私を「二階」に誘ったではないか？ 彼もまた地上における支払いとしてのどんな苦しみも軽侮しないように教えたのではなかったか？

ムーヴメンツの練習で

グルジェフから個人的な助言を受けることができなくなってしまった人たちもいた。といっても、それは彼らが、自分から質問するのをやめてしまったからである。だが、そういう人たちにも、「ムーヴメンツ」からいろいろなことを学ぶという機会は残されていた。[グルジェフのアパルトマンでの集まりに比べると] ムーヴメンツの場には、もっといろいろな段階にある、もっとおおぜいの人たちがあらわれた。こちらは、ある意味ではもっと参加しやすい集まりで、参加を認められるための条件もかなり違うようだった。新しい人たちがぞくぞくと押し寄せたので、何度もクラス分けをして、初心者向けのクラスを増やす必要があった。ここでもまた、いわゆる「ワーク」との関係で先に描写したような、二つの対照的な方向性が認められた。[一方ではグルジェフの教えへの関心からムーヴメンツに接近する人たちもいたが] ムーヴメンツは内的な中心を見出し出す人たちを幅広く魅了し、そのなかには、グルジェフの名前を聞くのも初めてで、ムーヴメンツが巨大な教えの体系の一部であることをわかっていない人たちもいた。彼らは練習を心待ちにしている、不思議なぐらいに時間を守り、欠かすことなくやってきた。彼らの熱心さは、一見してまったく性格の異なる二種類の人たちを思わせた。つまり、修道院の新生みたいでもあったし、ラグビー部の選手みたいでもあった。こうしたことがグルジェフの狙いどおりだったのかどうか、私にはわからない。こうして集まってきた人たちに列を組ませ、振り付けを与え、鋭い目をもって観察する。それはすべて、卓越した舞台芸術家を育てるためだったのだろうか？ そんな卓越を求めて何になる？

この「ムーヴメンツ」というのはいったい何なのか？ どんなに巧みに説明しても、それを伝えるのは難しい。私にとりあえず言えるのは、その練習の過程では、「動作センター」の働きにおける並外れた正確さや複数の筋肉群の独立した制御が求められ、その結果、自分の身体の働きについて、とても身に迫った洞察が得られるということぐらいである。振り付けの厳密さに対する要求が増すほどに、いろいろな点に意識を向けながらも主体として留まり、同時進行する複数の動きの調和を維持する可能性の幅が広がっていった。もう体に任せてよいぐらいに動きに慣れたら、新しい振り付けが追加され、ついにエクササイズは初心者には想像もつかないほどの複雑さを帯びるが、こうなるともう、われわれは、すでに目を驚かせるほどのものとなった調和の美しさを追求する喜びに夢中になり、奮闘を続けるのだった。とんでもない挑戦を前にして、思考センターも叩き起こされ、やがて感情センターも働きだし、うまくすればその両方がこの奮闘に参加する。みずからそれを体験したことの無い人たちに、そこから生じる味わいをどんなふうにも説明できるだろう？ どんどん複雑になっていく数学的な演算を頭のなかで

続けながら非対称的な振り付けをもって腕と脚を動かし、しかもそんなことをしながら宗教的な精神性を追求する人たちの奮闘を目にして、外部の傍観者はどう思うだろう？これが宗教だとするならどんな宗教？ われわれはそんな言葉で頭を悩ませなかった。地下鉄を出て時間に間に合うように練習場に着くべし。まずはそれを考えることだ。自分の私的なトンネルからも出るべし。まずはそれを考えるべし。まさに自分の身体で起きている物理的な動きの調和に向けて努力しつつ、リズムやステップの正確さにも意識を向け、しかも頭のなかでは複雑な計算を続けているわれわれが、このすべてにおいて「精神性」を求めなさいという追加的な指示を誤解するはずがなかった。難しいのはその指示に従うことであり、その指示を理解することではなかった。

「ここで《ロード・ハヴ・マーシー》という言葉をお口にいなさい」とグルジェフは指示した。聞き分けのよい者たちはすぐに大声で「ロード・ハヴ・マーシー」と唱えだした（グルジェフ：「まだ声が小さいぞ」）。信心深い者たちにとって、これは無意味な言葉ではなかったが、身体運動と祈りのこうした組み合わせは彼らを仰天させた。肉体を駆使することから始まって、それに頭の働きが追加され、感情の高まりは最後に到来する。これは彼らの馴染んだお決まりの宗教的な形式からすると、あべこべなのだった。教会などとは違い、快適な膝ぶとんも、壮麗な祭壇も、ステンドグラスも、穏やかな賛美歌もなかった。かわりにそこにあったのは、ふつうの人の趣味には合わない強二度の調律がされたピアノから響く張りつめた中東風音楽、所定の角度で保持された両腕の筋肉に生じる緊張、しばし両腕を下ろして練習する複雑なステップの足音、そして頭のなかでのたえまないカウントだった。音楽で言うところのカノン（輪唱）を模した演舞として、各自が自分の列の位置に応じた順番で振り付けを展開させた。こうなると自分のまわりにいる人たちの真似ができない。しかも、ひとりがちょっとでも間違えると、まわりの人たちが動揺し、その列の全員が総崩れになりかねない。ときにはそれは隣の列まで伝染し、全隊列中の四十二人が大混乱に陥ることもあった。そんななかであって、われわれは、恥ずかしさや他人から笑われることへの恐れをまるごと捨て去り、「ロード・ハヴ・マーシー」という言葉を大きな声で口にするように言われた。

目を閉じて感慨にふけったり、うっとりした表情を浮かべたりというようなこととは、われわれはまったく無縁だった。ムーヴメンツはときには見事な仕上りを見せた。ムーヴメンツ第二十七番（題名はなかった）がとうとう一定のレベルまで仕上がったとき、われわれは初めて、機械的な動きからの解放のグループとしての実現、そして意識の完全な支配下でのなめらかな「機械」の運転という目標への到達を垣間見た。それは精神が肉体を従えて高みに昇る体験だったが、なによりもわれわれを圧倒したのは感情の深まりと高まりだった。多大な努力によって高みに達したが、そこから生じるめまいゆえ

に、そこには一瞬しか留まれない、というような思いを味わった。それはまた、何らかの危険から逃れるために全速力で疾走し、自分がそんなに早く走れるのに驚く人の「超努力」の味わいのようでもあった。ムーヴメンツでの一瞬の高揚は、グルジェフがその場にはいないときのほうがよく起きた。彼は毎回、複雑な指示を追加したり、新しいエクササイズを振り付けたりしたので、そのただなかでは、一息ついたり、ゆっくり味わったりする余裕がなかった。

彼は生徒たちの間を歩き回り、そこかしこで、列の並びを正したり、だれかに胴体をもっと曲げさせたり、腕や脚の位置を直したりした。ひとつの列の振り付けが済むと隣の列に移り、そして一巡した後には、次の姿勢が示された。そうして各列の振り付けが決まり、動きのなかで再現されると、一連の姿勢は、まるで波のように列から列へと展開されていくのだった。「体にかまいすぎるな、大事なものは内面の状態である」。私はそのような声を聴いた。「これはヒエログリフによる伝達なのだ。それをこうしておまえたちに再現させることで私はそれを伝えるが、そこに秘められた無尽蔵の教えについては、私はけっしてあからさまには語るまい。たとえ不器用でも、下手でも、動きに力が欠けていても、かまわずに続けなさい。みずからの筋肉に、頭に、そしてできれば心にも、これらの文字を刻みなさい。そして自分の内部において、これらの文字を解読しなさい。自分のなかに教えを刻まれた者だけが、その教えを理解できる。こうしておまえたちは、生きた象形文字となる」

何人か傑出したインストラクターがいた。この方面で多大な才能を見せたのは、ほとんどが若い女性だった。彼女たちは、ムーヴメンツ全体の振り付けを帳面に記録したが、小さな絵や図を添えられた譜面は、ほんとうにヒエログリフを思わせた。たまに観客を前に演じる機会があった。あるとき、グルジェフは持ち前の気まぐれさを発揮して、全員にトルコ風の衣装を着せた。こうした試練には耐えるしかなかった。周囲の者たちからの誤解や憶測が最高潮に達した。見物することにしか興味のない観客のうち、美的センスとかいうことに口うるさい者たちは、あきれて帰っていった。そこまで批評家気取りではない観客のなかには、衣装がどれほど奇抜かとかいうこととは無関係に、自分にはよくわからないがなにか意義深いもの、もしかしたら驚異的なものを目にしたのではないかと思う人もいた。公演の後、トルコ風の靴をはいたバレエ団員という奇妙ないでたちのわれわれパリジャンたちにグルジェフは飴を配った。

老人との別れ

現代の魔術師は病院のベッドで死んだ。世間の人たちはそれでは満足しないみたいだった。毒ニンジンでやられた？ それとも呪い人形？ または毒ガス？ 死因は肝硬変と推定された。いずれにせよ自然死である。葬儀はロシア風に行われた。[葬儀の行われたロシア正教の寺院のある] ダル通りは、パリ中央部のスラブ系住民の多い地区の一隅にあった。花束と花輪で飾られた葬列は、そこからフォンテーヌブロー＝アヴォンへと向かった。ああそこは、かつて「人間の調和的発展のための学院」のあった思い出の場所だ。そこでかつて、キャサリン・マンスフィールドは、[グルジェフに関する誤解を解こうと] 自分の文学仲間たちに空しく手紙を書いたのだった。グルジェフは、彼女の眠る隣の区画に葬られた。これで永遠にキャサリンは彼のそばにいられる。

たくさんの人が泣いていた。私は自分の涙の味を吟味した。嘘くさい味がした。この涙を顕微鏡で観察したら、汚いバイキンが見つかるぞ。私は自分が記憶に留めようと努力した死せるグルジェフの顔を思い浮かべ、それを心のなかでじっと見つめた。私はこの人をほんとうにわずかしか知ることができなかった。私はこの人を知ろうとするうえで、あまりにもへなちょこだった。私は泣いた。今度の涙は本物だった。

犬のようにくたばるとのこと……。ジョルジュ・イワノヴィッチ？ あなたはあなたの魂を救ったのですか？ 粗悪な物質と死すべき働きと五感による幽閉の外へと、あなたなあなたの魂を解き放ったのですか？ あなたは意識の力により力の結晶化を遂げたのですか？ そして神と一体になったのですか？

チベットの言い伝えにあるような十四日目の奇跡を期待していた人がいたならば、彼らはがっかりしたことだろう。現代の魔術師はひとり人間であり、現代のキリストさながらに墓からよみがえったりしなかった。

それでも彼は犬のようにくたばったのではなかった。死を間近にした彼は、引きつる筋肉を動かして、不思議なゼスチャーをしてみせた。いまはもうふたたび開くことのないまぶたの背後、このうえなく静まった表情の背後には、力があつた。われわれ生徒たちはそのまなざしに打たれた。すべての目が光を捉え、あたかも食べ物のようにそれを消化した。

ここでまたもや、糸が切れ、未来への道が絶たれた。「君たちをさんたんたるありさまのなかに残し、私は去っていく！」と、死を目前にして彼はつぶやいた。彼の病床の傍らにいて、そのときもう私には、これからどんなふうにして直線的な進路が断たれ、渦巻きのなかに吸い込まれていくかが見えた。

みんなあなたのことを笑い草にするだろう。老いた頑固者、宗教の創始者、あるいは「ふつうの馬鹿」として扱うようになるだろう。思想家だったと言い張る者さえあらわれるかもしれない。

私はこれほど熾烈に真理を求めた者、みずからの魂のためにこれほど大胆な企てをした者をほかに知らない。パスカルにしてプルースト、デカルトにしてラブレー、ルクレティウスにしてガリバー、トビアスにしてエンジェル、私はあなたに敬礼する！ 父の御許へと人を導くのがキリストならば、あなたは私をキリストのもとに連れ戻してくれた。文字と言葉をもって教える者たちがはびこるなか、あなたはみずから血肉を分かち与うことでわれわれを教えた。いかにして意識が創造に寄与するか、それはわれわれの想像を絶する。あなたはそれによって実現される宇宙的な調和の図絵を見せてくれた。

あなたのほかにだれが、あなたに代わってそのような人生を歩み、それを成就させられたらろう？ 最後の最後になって、あなたは私をほんとうに泣かせた。ムッシュー・グルジェフ、私はあなたを愛していたに違いない。

あとがき

私の洞察や理解の正確さ、そして私の善意まで疑われることがあったとして、それは無理のないことだろう。「証言よりも証人を問え」というのは、まさにそのとおりである。だが、私が何者であろうとも、私は自分が見て、感じて、理解したことを偽りなしに書いたのであり、これは私にとっての真実である、唯一の生きた真実であると誓うことができる。「生きた真実」と私は言ったが、ここで言う真実とは、あらゆる生命体と同じように、みずからの死と再生、成長と破滅の種をその内部に宿しているところの真実である。

私はグルジェフの賛成者なのか反対者なのか？ もちろんその両方である。そうあらざるをえない。われわれは、神との関わりにおいても、自分自身との関わりにおいても、自分の人生との関わりにおいても、これと同じジレンマに引き裂かれているのだから。もっとも、死んで伝説化されてしまった後ならば、事情は異なる。偉人伝や聖人伝には、あたりさわりのないことしか書かれない。すべてがわかりやすく説明され、あとはずっと、たったひとつの解釈、たったひとつの教え、たったひとつの思い込みで事が足りる。思い込みというのはつまり、そのときにはもう、生身の人間を前にして各人の信頼が問われるようなことはないからだ。ウスペンスキーの本を読んで、賛成するなり反対するなり、好きなことを言っていればよろしい。私が思うには、グルジェフの宇宙論をろくに考えもせずには呑み込むのも、逆にまったく受け付けないのも、同じくらいばかげていて、浅はかなことである。グルジェフの生前と死後を問わず、驚異も脅威も感じずにグルジェフの教えを勉強する人たちは、ひどく幼い。このような人物を相手にすると、人は引き裂かれる。これは認めるがあれは認めたくない。一方では自分を守りながら、他方では何かを教えてもらおうとする。こうして彼との格闘が始まる。これは彼を敵にまわすということではない。こうして格闘することで、彼を理解し、彼を知り、ついには彼を愛するようになる。

とくにグルジェフの死後の時代、グルジェフをただ偉人として尊敬するというのは、グルジェフに対して誠実な人ならけっしてしようとはしない、たちの悪いトリックである。そのような尊敬は無礼である。

いかなる規範も無意味になったこの混乱の時代にあって、人が彼についてどんなことを言いだすか、わかったものではない。ここで「学者の言葉にまどわされるな。もっと目立たぬ者の語ることを聴け」という福音書の言葉の主旨に従って、次のように助言したい。

グルジェフの生涯と業績から最大のものを引き出したいと願う人が真っ先にするべ

きことは、つまらない理屈をこねる癖と体面を気にする癖を頭と心から一掃することだ。探求者はあまりにも簡単に信奉者に身を落としてしまう。過去の人々の偉大な業績は、彼らにとって致命的な幻となりかねない。頭が良ければ哲学者気取り、行動派なら英雄気取り、情緒志向なら宗教者気取りで、落ち着くところに落ち着いてしまう。自分の性格の型から抜け出すことがない。

だが、グルジェフは手ごわい。献身や涙が通用する相手ではない。素手での取っ組み合いである。頭の良さはお呼びでない。奉仕など期待していない。傾倒や崇拜も無視される。グルジェフのところにやってきた人は、渴望と恐怖がせめぎあうなかで、心を決めてやってきた。慰めてもらうことも、安心させてもらうことも、賢者になることも期待せずに。そして、彼が教えたのはただひとつ、人間であることの意味だった。

善良さや頭の良さや信仰は、まったく問われなかった。多少の勇気を問われることはあったかもしれない。しかし、もっともふつうに問われるのは、いったい自分なんてものがあるのだろうかということだった。ここで忠告しておくに、この問いかけを前にして、あなたもひっくり返ることだろう。だから、そんなふうにはひっくり返ることは絶対に必要なのだと、自分でわかっていないのなら、こんなことには興味を向けないほうがよいだろう。あなたはほんとうはいまのままでいたいのではないのか？ 自分は半分死んだも同然だと思っても、それは自分の空っぽさを全面的に実感するよりはましだ。ちょっとした好奇心からやってきた人が、自分なるものの存在の基盤に対する恐るべき疑念に突き当たるということは、実際にありえた。

もちろん、引き返すことはできた。この山は高すぎるし、適切が案内人がいないのではなあ、とか言いながら。だが、適切な案内人がいたならどうする？ それでも危険だからと、人はやっぱり尻込みするだろう。

グルジェフについて書いておいて、危険についてなにも触れないとか、なんの警告もしないとかいうのは、片手落ちだし、不親切でもあるし、グルジェフを軽く扱っているということにもなる。

私はありのままを書きたいので、グルジェフにまつわる愉快的笑い話や、グルジェフがしばしば使ったきわどい言葉についても書き漏らさないのだが、それらを読んで憤慨する人は、グルジェフとのつきあいで求められる最低限のユーモアも持ち合わせていないようであるから、彼の死後においてさえ、彼を知ろうとなどしないほうが身のためだろう。

最後に言うべきこととして、読者はこれを読んでいて、グルジェフに対する永

遠の感謝と敬意を私がそこかしこで控え目にながら表明しているのに気づかなかったかもしれない。もしもそうなら、それはたんに私が舌足らずのアホだからである。

もうひとつだけ言っておきたい。私の書いたことをじゅうぶんに理解してもらうには、できれば批評家やジャーナリストの書いたものではなく、グルジェフのもとでの取り組みに実際に加わった経験のある別の人たちの書いたものと読みくらべてもらう必要がある。そういう人たちは、なかなか書こうとしなかったり、上手に書けなかったりするが、がんばって多少のものを書き残すことはあるだろう。グルジェフの弟子たちのなかにはすぐれた作家もいたが、彼らはみな死んでしまった。とくに傑出していたのは、ルーク・ディートリッヒとルネ・ドーマルだった。私はルークをよく知っていたので、もしも彼が死ななかつたら、グルジェフについてすぐれたものを書いたであろうとすることができる。ドーマルには会ったことがないので、彼について、私からはなにも言えない。グルジェフをめぐるいろいろな人の証言を本にまとめたいというルイ・ポーエルからの誘いを受けて私はこれを書きだしたので、自分のつたない経験に関するこの記事が、「元弟子」から寄せられた唯一の記事ということにはならないだろうと思っていた。私が書き漏らしたことや下手に書いてしまったことやうまく説明できなかったことについては、他の人たちの書いたものが内容を補ってくれると期待していた。ところが、私以外の人たちは書くのを断念したという。

生きている者たちが何を書こうと書くまいと、それは本人の勝手である。だが、死んでしまった者たちは、自分からはなにも言えない。別の人たちが当人になりかわって、好き勝手なことを言いだす。というわけで、ディートリッヒやドーマルのシンパらしい人たちが、グルジェフについて好き勝手なことを言っているが、それはこのふたりが付けていた貴重なノートに記録されていることと矛盾している。こうした代弁者たちは、このふたりの作家を擁護するという名目で、さんざんな軽蔑の言葉をグルジェフに浴びせてきた。

これは弟子としての自己満足だが、私はそれらの軽蔑をあたかも自分への軽蔑のように受け取ることに喜びを感じる。グルジェフは、キリストに関する私の理解を全面的に改めてくれたので、もしも今後、グルジェフがジャーナリストや大衆によって「公認」されることがあったとしたら、私はかえって気色が悪い。

私は「火の洗礼」の唱道者ではないが、グルジェフが残した生きた教えを段ボール箱に詰めて保存しておこうとする者たちには、そんな危険物はできるだけ早く人に渡したほうがよいのだと言いたい。その唯一の正当な相続者は全世界、つまりわれわれの隣人なのだから。

そして私の隣人たちは、ぜひ私のような未熟者の証言だけで満足しないでいただきたい。福音書にあるように「死者がふたたび語りだす日」が来るだろう。グルジェフはふたたびみずから語りだす。彼が残した難しい本は、最初は読者を絶望的な思いに浸らせるだろうが、これを読むのは「ワーク」に加わることに等しく、みずから望んでそれをする者はみな、やがて開けてくる素晴らしい眺望に狂おしいまでの喜びを感じるだろう。

(おわり)

英語版（外部リンク）

http://www.gurdjieff-bibliography.com/Current/09_schaeffer_old-man-movements_2004-07-02.doc
